

「義務教育に係る諸制度の在り方」についてと地方教育委員会

～子どもの学びを支援する地教委の施策を通して～

中間市教育委員会
教育長 船津 春美

義務教育は、国民が共通に身に付けるべき公教育の基礎的部分を誰もが等しく享受し得るように制度的に保障するものである。

さらに、教職員がその能力を十分発揮し、子どもたち一人一人の個性に応じ、その能力を最大限に伸ばす創意工夫に富んだ教育活動が行われるとともに教育行政がこれらの取組を適切に支援し、学校に対する保護者や国民の信頼に十分応えていくために国と地方公共団体は、その役割と責務がある。今回、諮問されている検討項目について例示されている二つのうち「義務教育の目的、目標を踏まえた多様な学校間連携の在り方」（幼小、小中、中高の学校間連携等）については、検討すべき課題があり、何らかの方策を見出す必要があると考える。

もう一つの「義務教育に係る就学に関する制度の在り方」については、公立学校を主管する地方教育委員会としては、切実さがあまり感じられない。

しかし、学校制度の見直しについては、義務教育のあり方をより望ましい方向に導いていく上で、極めて重要であることは言うまでもない。しかしながら、現段階においては制度そのものを大きく変えるといったことよりも、それらにかかわるさまざまな推進事業を有機的に補充・関連させることによって、学校教育と地域教育の相乗効果が期待できるということを考えてみたい。

私は、教育現場に深くかかわり諸事業を推進する立場から、本市での地域教育の先導性・継続性に着目し、学校教育において「心に響く活動づくり」を展開することによって、教育活動の活性化を図り、子どもたちの「生きる力」の育成をめざしているところである。

● 地教委の活性化のための施策

学校と教育行政の接点は地教委であり、地教委の主体性や創造性に基づく学校への適切な指導がない限り、国や県の施策・事業は具体化しない。また、地方分権による地教委独自の行政施策の策定も問われており、地教委の活性化は義務教育学校の充実のための重要な課題である。その活性化の具体的なものとして、以下、本市の子どもの学びを支援する地教委の施策と各学校における取組を列挙したい。

(1) いきいき教育特別推進事業

児童・生徒の主体的・創造的な体験学習を通して、社会の変化に対応し、自ら学び、積極的に社会参加することのできる心豊かな人間を育成し、住みよいまちづくりをめざす二つの事業を展開している。なお、この事業に係る費用については、全額中間市が負担している。

小学生対象の「キラキラなかまっ子自然体験学習事業」は、本市と地理や歴史が大きく異なる国内（北海道）での自然体験学習を通して、自然を大切にする心や、お互いに尊重する心を育むことをめざしている。

中学生対象の「フレンドリーなかま国際交流事業」は、海外（オーストラリア）での語学研修やホームステイを通じた国際交流体験活動で、本市における英語教育の向上及び自主性の伸長を目指した施策である。二次に渡る選抜試験を実施し、英検３級程度以上の生徒を通訳の帯同なしに海外に派遣している。十年を超えるこれまでの実績から、この事業への参加を一つの目標に小学校時代から英語に関心を持つ子どもたちも出てきている。

(2) 学習サポーターの導入

地域の教育力活用の一環として身近な大学と連携し、大学生をサポーターとして積極的に受け入れ、さまざまな教育活動の支援を実現することによって、学校教育のさらなる改善・充実を図っている。このことは、将来的な展望として、教育現場における大学生のインターンシップの検討・試行にも結びつくものと考えている。

(3) 読書活動の充実

子どもたちの読書活動を充実するために、学校教育における読書環境の構築に努めている。ハード面では、各学校の蔵書数の増加や施設設備の改善・充実があげられるが、同時に、ソフト面としては、読書ボランティアの積極的な活動や意識の高揚など、人的な支援が多様な教育効果を引き出している。さらに、中間市読書推進委員会が、本年度小・中学生と先生 みんなが選んだ「おすすめの本」を発刊。

(4) 英語活動や情報活動の推進・開発

英語活動については、その運営とあり方に関する研修・協議を行うとともに、拠点校を「基底カリキュラム」の活用にも努め、ALTの効果的な活用を図っている。また、情報活動については、子どもたちのスキルの向上はもとより、氾濫する情報の中にあってそれらを取捨選択する能力の育成も重要と捉え、生きて働く学習活動をめざしている。

(5) 安全指導（教育）の定着

昨今、子どもたちにおいては交通安全の必要性に加え、不審者への留意が強く叫ばれて久しい。本市では「明るい街づくり課」を設けて防犯指導や危険抑止に努めているが、学校においても地域住民と一体になってさまざまな取り組みや対策を講じている。

とりわけ、学校における具体的な取り組みや対策としては、集団登校・グループ（近接学年）下校、地域住民・保護者等の安全立証、教職員による校区巡回指導、校内不審者対策としてのカラーホイッスルの常時携帯、地域のスーパーマーケットや菓子店による学校モニター等々、いづれも着実に成果を上げている。

(6) GT (Guest Teacher) の積極的な活用

各種分野における専門的な知識・技能を有する地域住民をゲストティーチャーとし、市内の小・中学校において効果的に活用し、多様な体験活動を取り入れた教育活動を展開している。このことは、教育の多様化、学校の活性化はもとより、地域社会に開かれた学校福利に結びつくとともに、地域社会の教育力の向上についても大きな成果を上げている。

(7) 青少年に贈るコンサート事業

毎年、市内の中学2年生約500人とその保護者約200人を対象とした、九州交響楽団によるコンサートを開催し、プロによる演奏を通して、本物の芸術文化を体験している。思春期の中学生は多くの悩みや不安を抱えているものであるが、音楽を通じて文化の向上や心の癒しの効果もあり、素直に感動する生徒たちの姿が見られる。また、社会教育事業であり、学社融合の一環として、青少年の健全育成を図るなど成果を上げている。

(8) 「総合的な学習」としての“なかよし”（集会活動）の実践

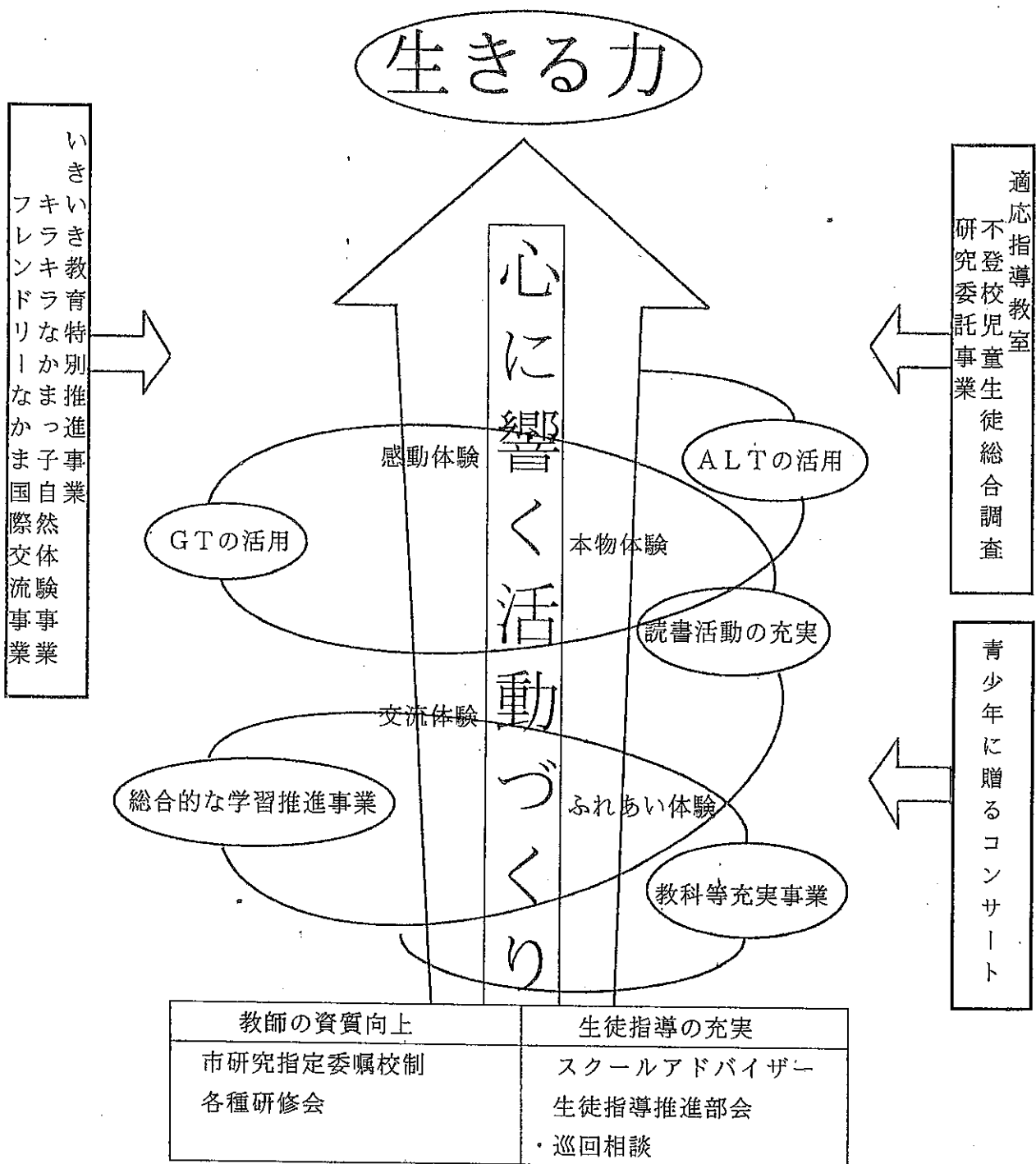
学校教育にあっては、子どもたちの願いや喜びなどを喚起し、それぞれに自分たちの思いをもとに進んで取り組む教育活動を展開したいと考えている。新しい時代に生きて働く自主性・主体性を伸ばし、より確かな学力を育成するために、すべての教科・領域等の学習を系統的・効果的に実践するとともに、「総合的な学習」の充実を図っている。

(9) 市内小・中学校の学力向上の具体的方策

平成13年度に中間市教育委員会は、学校教育の基本施策を掲げて、各学校が児童生徒の基礎学力向上などをはじめとする「生きる力」の育成に向けての具体的な取組を実施できるように努めている。それらの施策を受けて、「本市内の各学校が日頃実施している学力向上の具体的方策及び今後の実施計画を取りまとめ、1：学校全体で取り組む授業の工夫改善 2：学年・学級における学習の取組 3：個別指導 4：その他の取組」の四つの視点から整理し、冊子として発刊し、各学校、関係機関に配布している。

本市における子どもの進学先	
小学校卒業時における進学先	
公立中学校	98, 4%
私立中学校	1, 6%
中学校卒業時における進学先	
公立高校進学率	64, 4%
私立高校進学率	32, 5%
その他	3, 1%

構 想 図



生きる力

心に響く活動づくり

いきいき教育特別推進事業
キラキラなかまつ子自然体験事業
フレンドリーなかま国際交流事業

感動体験

GTの活用

交流体験

総合的な学習推進事業

ALTの活用

本物体験

読書活動の充実

ふれあい体験

教科等充実事業

適応指導教室
不適応児童生徒総合調査
研究委託事業

青少年に贈る
コンサート

☆教師の資質向上
市研究指定委嘱校制
各種研修会

☆生徒指導の充実
スクールアドバイザー
生徒指導推進部会・巡回相談

読書活動の充実 ～読書ボランティア事業～

1 読書活動の現状

本校では平成14年度に初めて、学校通信などを通して読み聞かせをしてくださる読書ボランティアの方々を広く募集した。その結果、「我が子のために少しでも焼くに立つのなら」「子どもたちが喜んでくれるのならがんばりたい」などと言われ、積極的に申し出てくれる保護者や地域の方々十数人あった。実際に取りかかってからは、月1回の全体会で実施にあたっての反省の場をもつとともに、翌月の活動内容をあらかじめ決めるようにした。また、参加者自らが「饒舌」「早口言葉」「発声練習」などの学習会を設定し、子どもたちに少しでも上手に読み聞かせができるように努力を積んでくださっている。その後、参加して下さった方々が進んでその友人を誘ってくださるようになり、今では25人の方々に読書ボランティアとして登録をしていただいている。

2 事業内容

(1) 活動時間及び内容

学年	実施日	時間	派遣ボランティア名	活動内容
全学年 (全学級)	週3回 (月・水・金)	8:25 ～ 8:40	森 美幸 他8名	本の読み聞かせ 紙芝居 ブックトーク

(2) 読書ボランティア活用にあたっての留意点

読書ボランティア受け入れにあたっての環境作りを推進するために、以下のことについて留意する。

① 窓口一本化	教務（学校サイド）が窓口になり調整
② 実施日	月・水・金曜日の職員朝会の時間
③ 定例の全体会	月1回、当月の活動の反省と翌月の日程等の決定
④ 学習会の設定	本の読み聞かせ方や発声練習等 (他サークル等で活躍されている方に指導を受ける。)
⑤ 日程表の作成	学級担任に配布、読書ボランティア来校日の確認
⑥ 読み聞かせ一覧表の作成	ボランティアの方に読み聞かせした本についてカードに記入（日にち・学級・本の題名）していただき、一覧表にまとめる。学級担任に配布し、活動内容を知ってもらう。次回の本の選択にも利用する。
⑦ 本の選択	学校図書館の積極的な活用を図る。 読書ボランティア個人名のカードを作る。（コンピューター管理になっているため） 学校図書館にない本については購入希望を出していただく。

(3) 市立図書館との連携

ボランティアの方への情報提供（市立図書館の「〇月のあたらしい本だより」の配布）
学校図書館にない本については、市立図書館から貸し出しを受ける。（夢ネット事業・インターネットでの申し込み利用）

3 成果と課題

◇ 子どもたちは朝登校してからすぐの時間に読み聞かせをしていただいているということで、心が和み、心情的にゆとりある静かな一日が始まり、1時間目から落ち着いて学習ができるようになった。また、遅刻がほとんどなくなった点でも効果が大きかった。

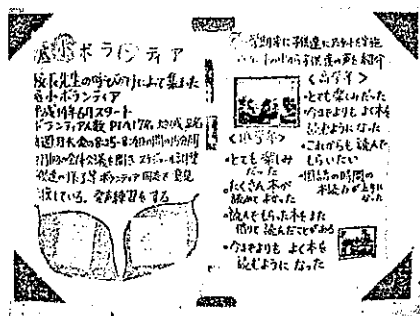
◇ 子どもたちにとって最大の効果は、何といってもたくさんの本にふれることができたことである。1年生は1年目だから百数十冊程度であるが、その他の学年は二百冊を超える本に出会ったことになる。これは大変素晴らしいことであり、子どもたちの学力向上に結びついていると思っている。

◇ 子どもたちには学期末には毎学期アンケートを行っているが、その集計からも好ましい結果がたくさん見受けられる。

- ・ 今までよりよく本を読むようになった。（低学年98%）（高学年74%）
- ・ 本を読むのが好きになった。（低学年100%）（高学年57%）
- ・ 本をよく借りるようになった。（低学年88%）（高学年30%）
- ・ 国語の時間の本読みが上手になった。（低学年79%）（高学年4%）
- ・ 学校の図書室によく行くようになった。（低学年57%）（高学年57%）
- ・ 読書ボランティアのことを家庭でよく話す。（低学年67%）（高学年17%）
- ・ 市立や町立の図書館によく行くようになった。（低学年47%）（高学年22%）
- ・ 読んでもらった本のことを話すようになった。（低学年21%）（高学年17%）

◆ 高学年は読書力に差があるため、とても本を読むのが好きな子どもたちにとっては、自分で読みたい本をこのような場で個別に読みたいと考えている子どももいない訳ではない。

◆ 現在とてもよい状態で地域の方々や保護者の方々が協力してくださっているが、今後これを続けていくためにはどうしたらいいか、常に工夫・改善を図っていく必要がある。



ALTの活用（英語活動推進委員会を中心にして）

1 英語教育推進委員会の設置

① 目的

英語活動の運営と在り方等に関する研修や協議を行い、英語活動（英語教育）の識見を高め、もって各学校の英語教育推進に資する。

② 対象者

各小学校の英語活動推進担当者

③ 本年度の努力点

ア 「基底カリキュラム」の作成と更新（CD-ROMにまとめ、活用更新をする。）

イ ALTの活用を図る。（打ち合わせ時間等、改善点を明確にする。）

ウ 小中連携の在り方を探る。（本年度は、中学校の授業参観をする。）

④ 具体的な計画

本市では、嘱託のALTが、小学校に1名、中学校に1名、市の事業として配置されている。また、英語活動は、ALTと子どもたちをよく知っている担任とが連携をし、英語をコミュニケーションの道具としながら豊かな体験活動をすることが、どの学級の子どもたちにも力をつけていくことになると考えられる。そこで、ALTの効果的な活用を図るため、以下のように取り組む。

ア 拠点校において、ALTと英語活動推進者が「基底カリキュラム」の作成（1単位時間のteaching plan）と教材・教具の開発を行う。

イ 拠点校にて、teaching planに基づき、実践を行う。

近隣の学校へALTが 各学校の英語活動推進担当者の計画にもとづき、担任と連携しながら授業を行う。

ウ 各学校での実践をもとに、teaching planの更新を行う。（CD-ROMの更新をする。）

2 拠点校での取り組み



① 担任やALTが活用できる指導事例の作成

各1単位時間におけるteaching plan形式（学習展開）を原則として決めることを考えた。子どもたちもHRTもその活動が積極的・活動的になると考えたからである。

また、ALTも1時間の流れがわかり、かかわり方や連携が十分に生かされて効果的な活動となると考えたからである。（あいさつ→歌→チャンツ→ゲーム）

Teaching Plan形式

- ▶ あいさつ ? 自分の感情で
- ▶ 歌 ? 共通曲・教材を
- ▶ チャンツ ? リズムや音楽にのせて
- ▶ ゲーム ? 会話の一場面から
- ▶ あいさつ ? 内容にかかわって

② 教材・教具の開発・充実

英語活動を活性化するには、1単位時間の指導事例があること、そして、教材・教具があることが必要だと考えた。ALTの家族や母国についての話なども、教材化することができた。そして、英語環境づくりも重要であると考えた。英語による放送、給食時間や掃除時間などのお知らせは、市内中でも取り組んでいる。

3 成果と課題



- ① 子どもたちは、ゲームを通して、あるいは、歌やリズムにのって、話す活動をすることで、話し慣れてきた。



- ② 写真や絵を手がかりに、ALTの語りかけや歌・遊びなどの聞く活動をすることで、聞き慣れてきた。英語が自然に五感に入り慣れ親しんでいると言える。

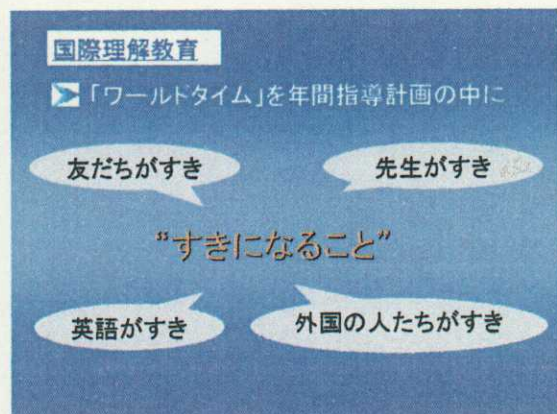


- ③ 会話を楽しむという姿が見られるようになった。身近な外国の文化をもった人（ALT）に対して、休み時間などに気軽に語りかける子どもたちの姿がよく見られるようになった。ALT以外の外国の方に対しても、出会うことを楽しみにするような雰囲気を感じられる。また、英語活動の中で使う音楽を休み時間や給食時間などに放送することで、子どもたちがスムーズに慣れ親しみ、学習そのものが自然に受け入れられるようになった。学習後であれば、子どもたちがそれらを口ずさむ姿が随所で見られる。

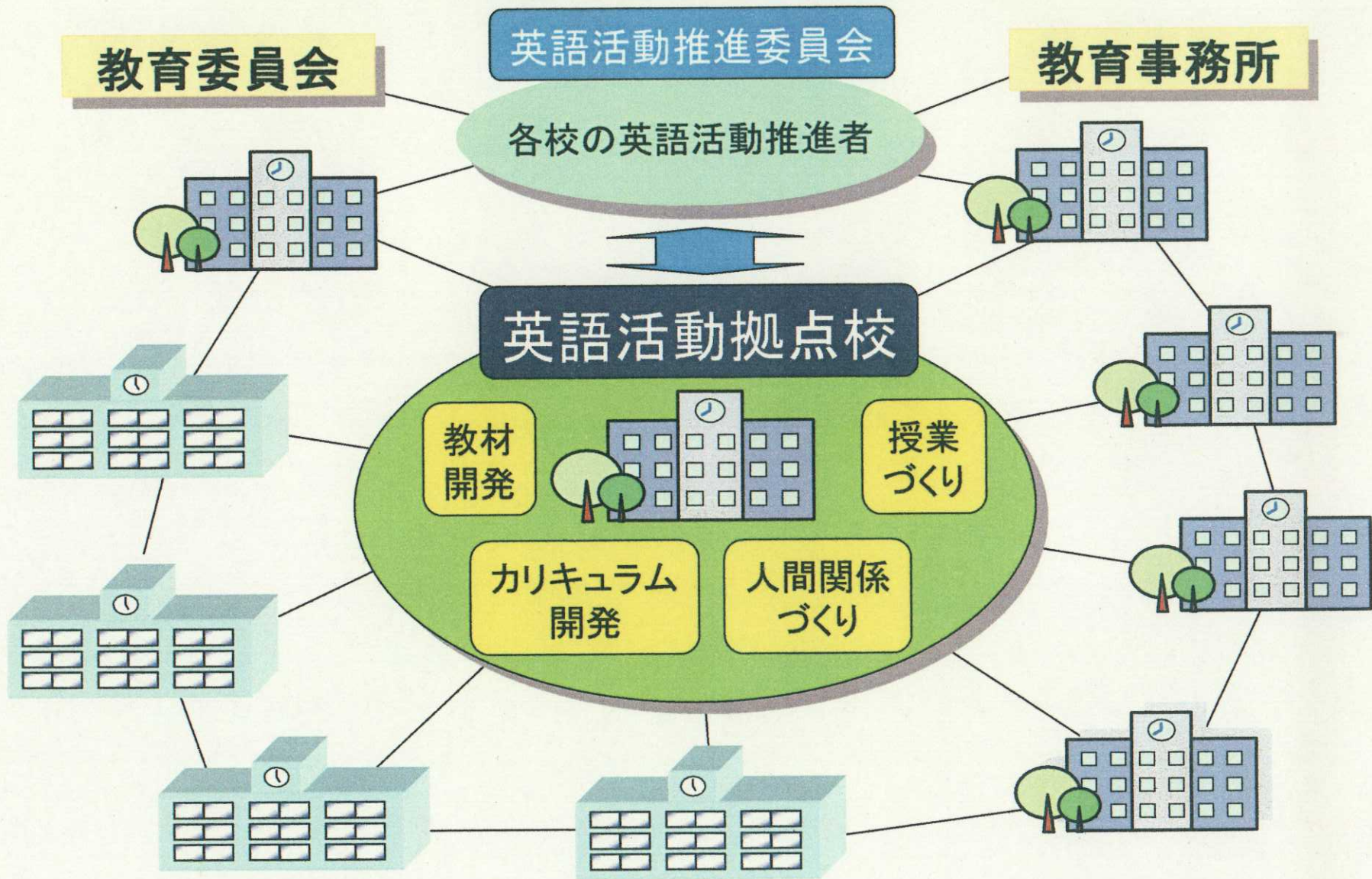
- ④ 中でも英語活動を活性化したのは、教師も子どもたちもごく自然にALTや外国の人と接することができるようになったことではないかと考えます。本校では、国際理解教育の一環として、英語活動を大切にしています。友だちが好きで、英語が好きで、そして、外国の人たちが好きで、とう風に、まわりのみんなが「好き」になることこそが、国際理解のおおもとなのではないかと考える。「ワールドタイム」を年間指導計画に位置づけ実践を行っている。

4 課題

- ビデオ・番組視聴・外国の遊び等々、さらに多様な活動を取り入れ、実践を積むことによって、「基底カリキュラム」を適宜書き換えていくことが肝要である。
- 情報活動などとの連携を密に図り、E-mail・手紙・掲示物等が有効に活用できるように、英語環境をさらに整備していく必要がある。



英語活動拠点校システム



平成16年度 義務教育課指導班の課題及び主な施策

国の動向

- ※地方分権の推進 ※教育の構造改革 ※学校週五日制充実
- ※中教審答申・学習指導要領の一部改正
- 基準性の明確化 ○総合的な学習の時間の充実
- 個に応じたきめ細かな指導の充実

改革の波を教室まで

社会情勢

- 学力低下への懸念（基礎・基本の徹底と個性の伸長）
- 生命尊重、規範意識、基本的生活習慣等の欠如
- 家庭・地域等の教育力低下
- 不登校、青少年犯罪等の憂慮すべき状況

確かな学力

生きる力の育成
豊かな人間性

健康・体力

確かな学力の育成

- ① 特色ある教育課程の編成、実施、評価
 - 確かな学力向上に重点化した指導内容、指導時数及び指導方法の関連化
 - ・「基礎・基本の学習」・「発展の学習」等の内容精選と指導時数の重点配当
 - ・多様な学習指導方法の位置づけ
- 総合的な学習の時間の充実
 - ・全体計画の整備・充実
 - ・内容充実と系統化、関連化（学年間、学校間、教科間）
 - ・教育資源の有効活用（施設、団体、人材）
- ② 学力向上システムの構築
 - 学力向上プランの充実と実施、検証
 - ・小学校一学年化 中学校一教科化
 - ・日常指導、家庭学習、読書活動の習慣化
- ③ 個に応じた指導の充実を図る授業改善
 - 学習集団及び指導体制の弾力化による学習指導法の工夫改善
 - ・少人数指導、習熟度別指導の充実
 - ・小学校教科担任制の拡大
 - ・中学校選択教科のコース充実
 - ・多様な教材の開発と学習活動の工夫改善
- 指導と評価の一体化
 - ・信頼性・客観性のある絶対評価の充実
 - ・評価計画・評価規準の具体化とその活用による指導と評価の一体化

主な施策・支援

- ① 学力向上総合対策事業
 - 学力実態調査
 - 判定資料 ○発展教材
- ② 英語能力向上事業
 - イングリッシュキャンプ
 - 英語活動教材
- ③ 科学教育推進モデル事業
 - サイエンスキャンプ
 - 理科大好きスクール
- ④ 学力向上アクションプランへの積極的指導
 - フロンティアスクール
 - 国語力向上
 - 学力向上支援
 - 学習指導カンパニー派遣等
- ⑤ 教育活性化推進事業（研究指定・委嘱）
 - ・重点課題
 - ・中長期的課題
 - やるキッズ育成支援事業
 - ・やるキッズ宣言運動
 - ・アビリティサポート支援
 - ・ボランティア支援
 - 各種実践事例集、手引き書等の作成・配布及び活用促進
- ⑥ 豊かな心育成推進事業
 - 「豊かな心を育てる学校教育のすすめ」
 - 児童・生徒の心に響く道徳教育推進事業
 - 豊かな体験活動推進事業
 - 道徳実態調査
- ⑦ いじめ・不登校問題総合対策事業
 - スクールカウンセラー活用事業
 - 問題行動に対する地域行動連携推進事業
 - SSN事業
 - 学校・警察連絡協議会
 - 子どもおたけび24
- ⑧ 教員の自己成長を促進する体系的研修の充実
 - 基本研修、課題研修充実による教員の使命感と専門性の向上
 - 管理職研修の充実による組織マネジメント能力の向上
- ⑨ 学校の自己評価システム確立への支援
 - 手引き書「学校改善のために」の有効活用促進
 - 重点課題「学校教育システム改善」

豊かな心の育成

- ① 道徳教育の充実
 - 全教育活動を通じた道徳性の育成
 - ・全体計画の整備、拡充
 - ・基本的生活習慣、規範意識、生命尊重の精神等
 - 道徳の時間の確実な実施と充実
 - ・魅力ある教材の選定と開発、活用の工夫
 - ・体験活動との関連化
 - 心のノート、具版資料等の効果的な活用
 - ・全体計画、年間指導計画への位置づけの明確化
 - ・家庭への啓発、協力依頼による連携強化
- ② 読書活動の推進
 - 学力向上プランへの位置づけによる全校的推進
 - ・国語科を中心とする読書指導の充実
 - ・常時活動としての位置づけ
 - ・NPO、読書ボランティア等の有効活用
- ③ 豊かな体験活動の充実
 - 自然体験、職場体験、ボランティア体験等の充実
 - ・学校行事、総合的な学習の時間等の効果的活用
 - ・家庭や地域等の体験活動との連携の推進
- ④ 生徒指導の充実
 - 積極的生徒指導の推進
 - ・生徒指導の視点に立った授業改善、人間関係能力
 - きめ細かな相談体制の確立
 - ・マンツーマン方式の充実
 - ・スクールカウンセラー、子どもと親の相談員の有効活用

信頼される学校づくり

重点課題研究指定・委嘱一覧

- ・14年度 道徳教育、授業評価システム
- ・15年度 選択教科、小・中連携
- ・16年度 心の教育、学校教育システム改善

組織マネジメントの確立による学校運営の機能化

- 効果的な結果の処理と公表を促進する学校評価システムの確立
- 教職員の自己評価を生かした主体的研修による資質能力の向上
- 学校評議員制度の効果的運営

中・長期的な教育課題に関する課題調査研究

- ① 確かな学力を育む授業改善
- ② 小・中の一貫性を重視する総合的な学習の時間
- ③ 幼児・児童生徒の規範意識の形成と指導
- ④ 自閉症児に関する個別の配慮